

第1話 ミーニシ篇

赤原タカがやってくる！

ゴゴ鳥が鳴くのを聞きながら、チルーは昨日のスープとパンを温めます。ゆったりと食事をした後は、少しばかり昼寝をして、黄色い刺しゅうの入ったブルーのワンピースに着替えます。そうして、しっぽ岬にある図書館へ向かいます。カバンの中には、お気に入りの便箋とブルーインクの万年筆。図書館の六角形の窓からは、昼なのに南十字星が見えます。チルーは窓際の椅子に座って、まだ見ぬ友に手紙を書きます。

1

お元気ですか。昨日は島にミーニシが吹いたんです。ひんやりとした風が私の大好きな季節を運んでくれました。とても心地よかったので、東ノ浜まで散歩することにしました。

すると入り江の木に、見たことのない鳥が止まっていました。ミーニシに乗って来たのかもしれませんが。隠れているようですが、シマ模様の尾が丸見えです。青灰色した鳥なんて初めて見たので、声をかけました。

早口で喋る鳥は赤原タカという名前で、アワティーという街から来たそうです。世界の絶景を回るタカミ旅行社を営んでいる社長さんでした。大切なお客さまを案内する場所を探していたところ、風のうわさでこの島のことを『光る島』と聞いたのだとか。私は赤原さんに島で一番長生きしているヤマガメオジを紹介することにしました…。



2

集落の奥にある瓦家の庭で、ヤマガメオジは日光浴をしていました。「オジ、お客さんを連れて来たよ！」

チルーが事情を説明すると、「だあ〜、まずは〜亀せんべいでも食べなさい〜」と言って、オジはカメカメ攻撃を仕掛けてきました。赤原タカは亀せんべいを3秒で平らげると、ゴホンと咳払いをして言いました。

「失礼ですが、私は今夜の風に乗って帰らなくてはならないんです。できればすぐに島の名所を案内してほしいのですが」

「夜までは〜まだ時間がたっぷりあるぞ〜。そう急ぐでない〜」

「まあ、そうですが……」

それからカラキティーを2杯飲み、日光浴の布団をしまって、ヤマガメオジは帽子を選びはじめました。ようやく氷玉の帽子をかぶったオジを、赤原タカはイライラしながら見ていました。

3

「じゃあ、まずは〜哲学の道を案内しようねえ〜」

ドスツ…ドスツ…ドスツ…。超スローペースで歩くヤマガメオジのあとを、チルーと赤原タカはついていきました。10分かかったどりついた先は、家の横にあるフクギの並木道でした。

…なんでもない丘。…なんでもない海。…なんでもない畑。その後も、ゆったりとした島観光は続きました。

「次は〜山の上の城跡に…」

ヤマガメオジが歩き出そうとしたところで、赤原タカはシビレを切らしたように言いました。「もういい！ 私はこれまで世界一の絶景をい・く・つ・も見てきた！ 平凡な丘や海や畑なんて面白くもなんともない！ それに、こんなにノロノロ歩いていたら何日もかかってしまう！ 悪いが勝手に島を見学させてもらうよ！」

「森にはクセ者がおるから気をつけるんじゃぞ〜！」

ヤマガメオジの言葉をふり払うように、赤原タカはビューンと飛び去って行きました。

4

「なんてつまらない島だ。これじゃサシバさんを案内できないな」赤原タカが木のでっぺんに止まって小言を言っていると、遠くの森がキラキラと光っていました。

「何だ、あれは？ もしかしたら……あれが光る島の秘密かもしれない！ 確かめてみよう！」

赤原タカは目を鋭くして森へと向かいました。森に近づく、と、乱れた風が吹きはじめました。上下左右からぶつかってくるように吹いてきます。飛行レースで優勝経験のある赤原タカでも苦戦するような風でした。

やっとのことで森にたどり着くと、キラキラ光っていたのは、木の枝からぶら下がった無数のCDでした。

「なんだ、コレは！ くだらない！」

赤原タカがじだんだを踏んでいると、紫色のベレー帽をかぶった鳥が声をかけてきました。島の芸術家、サルバドール・鳥です。「その君、ボクの作品を見て興奮しているのかな？ この作品はまだまだ序の口だね。森の奥にボクの最高傑作があるんだ。ぜひ見て行ってくれ」

赤原タカは否定しましたが、サルバドール・鳥は聞きません。無理やり森の奥に連れて行かれると、そこにはペットボトルで作ったピラミッドがありました。

「なんてやっばい！ こんなひどい島、二度と来るもんか！」

赤原タカはそう言い残して、夜の風が吹く前にアワティーの街へ帰ってしまいました。

5

「タカさんよ〜。なんであんなに急ぐのかね〜？」

夕日が沈み、風向きが変わると、ヨルノハズクが鳴きました。その声を合図に、カゼボトルたちがそれぞれの持ち場について、一斉にお尻を光らせました。すると、風の流れに合わせて、丘や海や畑の上がオーロラのように輝き出しました。

「キレイね。私が一番好きな景色。これを見ずに帰るなんて、タカさんはもったいないことしたわね」

「本当じゃの〜。待たなければ手に入らないものもあるんじゃよ」

チルーはカラキティーを、ヤマガメオジは酒を飲みながら、風の島の宴を楽しみました。（＝第3週に掲載）

風の名 …… 新北風（ミーニシ） ……

10月上旬ごろに吹く北東の風。ミーニシが吹くと、沖縄に秋がやってくると言われていよ。ミーニシに乗って、アカハラダカ世ムクドリ、サシバが沖縄にやってくるんだ。サシバたちは、本土の寒さをしのぐため沖縄にくるよ。

風の言葉

待たなければ手に入らないものがある